

吉井直三郎先生 を偲んで

日本生理学会特別会員
大阪大学名誉教授 河村洋二郎



日本生理学会特別会員，大阪大学名誉教授，兵庫医科大学名誉教授の吉井直三郎先生には病氣療養中の処，去る平成9年5月22日午前10時25分，入院中の病院にて心不全のため奥様に看取られながら静かに永眠された。享年87歳。

吉井先生について特記すべきは，我が国に精神生理学 (psychophysiology) を導入され，その研究活動を介して我が国における此の領域の学問の基礎を打ち建てられ，その発展に貢献されたことである。

吉井直三郎先生は昭和9年3月大阪帝国大学医学部を卒業され，直ちに同大学医学部第1生理学教室助手として研究に従事，昭和12年には心臓外科について当時から名声のあった阪大医学部第1外科教室に移られ心臓手術についての動物実験を担当された。心臓内手術の研究は血液循環の停止を前提としたため，脳の血流停止時間の限度を知る必要があり，イヌを用いて条件反射を指標に大脳皮質機能の回復を追及された。1940年代(昭和15年頃)初期の頃であって，当時これらの生理学的課題に関心を持っていた生理学者や医学者は我が国には殆ど存在しなかったと言えよう。

昭和16年(1941)には講師に昇任され，阪大医学部付属病院の石橋分院外科医長を勤められたが，昭和18年には新設の県立徳島医学専門学校の生理学教授に就任された。しかし第2次大戦も末期に近づき大

阪が空襲によって大きく破壊され混乱状況にあった昭和20年5月大阪帝国大学医学部助教授として帰任され，第2生理学講座の開設に当たられた。しかも当時，吉井先生は十二指腸潰瘍を患っておられ，昭和23年4月に教授に昇任されたのは胃の手術より回復されて未だ日も浅い頃であった。

終戦直後の大学は設備・備品は勿論，実験装置や実験器具についても，また研究予算も現在では想像もつかない悲惨な状況にあった。この状況下に数少ない教室員と共に新講座の運営は随分と苦難な事であったと思われる。

昭和23年(1948年)頃，我が国でもやっと脳波計や筋電計を使うことが可能になった。吉井教授は直ちに脳活動を脳波によって，行動の記録に筋電図を活用され，従来から手がけて来られた条件反射を活用して学習，記憶，意識あるいは脳死など人や動物の行動と脳機能との関係分析に努力され，精神生理学の開拓につくされた。

当時，日本生理学会には此の分野の研究を推進しておられた先生方として，東北大学の本川弘一教授，北大の藤森開一教授，東京大学脳研の時実利彦教授，慶応大学の林 麟教授など錚々たる先生方がおられた。いずれの先生方も今は故人になってしまわれたが，当時はこれらの先生方の協力によって文部省科学研究総合研究班や脳波筋電図学会が設立され，我

が国の大脳生理学研究が活発に推進されたと言える。吉井直三郎先生はこれらグループの中心的存在として貢献されただけでなく、脳波の慢性的記録、周波数分析を開拓されると共に、記憶に対する海馬の役割、学習形成過程における脳幹網様体の活動、さらにヒトの高次精神活動に前頭正中線シータ波 (Fm θ) の発見など国際的に高い評価を受ける多くの研究業績を積み重ねてこられた。

昭和49年4月1日大阪大学を定年退官され、直ちに新設の兵庫医科大学に招かれ第2生理学講座の初代主任教授に就任され、昭和57年3月御定年退職されるまで前記研究教育を続行されると共に多くの若手研究員の養成に勉められた。兵庫医大御定年後も民間病院に場をえられて、ヒトについての脳波研究を2~3年前までつづけて来られた。このように一貫して前記、精神生理学の発展につくされ、活発な学会活動を介して御定年後も世界の生理学会に貢献して来られた。例えば、国際脳研究機構 (IBRO) 設

立以来、昭和43年まで同評議会日本代表委員を努められ、また日本脳波筋電図学会理事長、国際脳波臨床神経生理学会副会長、など枚挙にいとまがない。さらに、学術雑誌 Brain Research (脳研究)、Physiology and Behavior、および Electromyography の各編集委員、昭和34年には「臨床脳波」を発刊され20年以上にわたって、その編集責任者として活躍された。吉井直三郎先生はけっして頑健なお体ではなかったが研究には厳格できびしく、また自己の考えをはっきりと主張される先生であったが、平素は口数も少なく、静かな方であった。忙しい教育・研究の合間には俳句を楽しまれ、「余生」と号して句集「文字摺草」を隆子夫人と共著で出版しておられる俳人でもあった。

御入院療養中とうけたまわっていたが、突然の御逝去の報に驚くと共に、今さらながら先生のお人柄と、研究哲学を思い感慨無量である。

心からご冥福をお祈り申しあげる。